

ヘルシンキ大学「Research Assessment Exercise 2005」に参加して

ヤーッコラ伊勢井敏子

1 はじめに

Research Assessment Exercise 2005は2005年にヘルシンキ大学で行われた大学評価のことを指しています。第1回目は1999年に開催されました。基本的に5年に一度(5年間全体評価)の開催ですから、筆者が参加できたのは幸運でした。日本の大学評価システムとは大きく異なります。大変興味深く、また、大学評価システムの参考になると思いましたが、その体験を本稿に記したいと思います。

ヘルシンキ大学(英語: University of Helsinki, フィンランド語: Helsingin yliopisto, スウェーデン語: Helsingfors universitet)¹⁾はフィンランドの首都ヘルシンキ市²⁾にあります。大学のキャンパスの多くは、ヘルシンキ市中心部にあります。現在のハロネン大統領(女性)も同大の出身です。ヘルシンキ大学は、研究教育に重点を置くヨーロッパ研究大学連盟(LERU)³⁾に加盟しています。

フィンランドは正式にはフィンランド共和国といえます。以下、省略して、フィンランドと書きます。

フィンランドは、最近、教育面で世界中から脚光を浴びていますが、実際にはよく知られていない部分が多いので、少しフィンランドについてご紹介しましょう⁴⁾。

フィンランドと言えば、森と湖の国、サンタクロースやムーミンという名前がすぐに浮かぶようですが、フィンランドという国が正確にはどこにあるか言い当てられない場合が多いようです。地図上ではスウェーデンとロシアに挟まれています。北欧5カ国(フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド)の一つです。スカンジナビア半島の付け根あたりにフィンランドがあります。ヨーロッパでは最北に位置します。

公用語は2ヶ国語(フィンランド語とスウェーデン語)ですが、これ以外にも、少数民族のサーミ語やロマ語なども使用されています。公用語が2ヶ国語あるという意味は、すべての書類や通り名など、正式な表記がすべて2ヶ国語併記ということです。しかし、公用語が2ヶ国語と言っても、実際には、国民の約93%がフィンランド語母語話者です。スウェーデン語を話す人々も、国籍はフィンランドです。

なお、フィンランドのスウェーデン語はスウェーデ

ンのスウェーデン語とは発音がだいぶ異なり、フィンランド語の発音の影響を受けた発音になっています。また、フィンランド語はヨーロッパにある大多数のインド・ヨーロッパ語族とは異なり、ウラル語族⁵⁾のひとつです。日本人にはとても発音しやすい言語です。

ヘルシンキ市はフィンランドの南端に位置する港町です。人口は約50万人程度ですが、現在はフィンランドがEUに加盟(2000年)してからは特に外国人が多く流入し、また、エラスムス計画(The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students: ERASMUS)⁶⁾により、外国人学生も急速に増え、非常に国際的になっています。国際化したといっても、外国人がこのような大学評価委員会の被評価者のメンバーになることは珍しい事と言えらると思います。

ヘルシンキ大学は国内最大の総合大学で、11学部(大学院各科も含む)とその他多くの研究所から成り立っています。国立大学ですが、フィンランドにはヨーロッパの多くの国と同様、私立大学はありません。

筆者は行動科学部(研究科) Faculty of Behavioural Sciencesの音声科学部 Department of Speech Sciences⁷⁾を卒業しました。その関係で、国際評価委員会の会議に参加するよう依頼されたわけです。

2 国際評価委員会

2.1 委員のプロフィール

Research Assessment Exercise 2005研究評価を担当する国際評価委員会 International evaluation committeeのメンバーは全員外部委員、すなわち、国外から各研究分野の専門家(博士号を持つ教授)が招聘されました。この委員が22グループに分かれ、数ヶ月かけて、全学部の評価を行いました。宿泊等の費用はすべて大学が負担しました。

私の所属する音声科学部には一般音声学、スピーチ・コミュニケーション、ログピディクスの3専攻がありますが、それらの専攻の専門家が評価に当たりました。

2.2 目的

大学は、大学の内部委員による評価と外部委員(国際評価委員)による評価を統合して、総合的な評価を行います。評価の目的は、将来に向けた研究発展の支

援をすることにあります。そのために過去の実績を分析する必要があります。その点において、学生による授業評価を中心に大学の教育評価が行われている日本とは事情が異なります。大学の研究活動をより発展させることを目的として、各分野における研究の国際的レベルに関して、国際評価委員会に過去5年間に蓄積された（大学の研究データベースあり）大学における研究の質を検証してもらい、将来に向けて大学での研究をどのように発展させたらよいかのアドバイスを仰ぐことにあります。この評価結果は学内での研究資金がどう使われるかに影響するわけです。前回（1999年）に行われた評価との比較もできる機会でもあります。つまり、過去5年間の研究活動の軌跡を客観的な評価により知ることにもなります。⁹⁾

研究といっても、各学部内の個人の研究集積だけでなく、ポスドクや博士課程の学生などにきちんと研究をさせているかどうかも含めた研究活動が査定の対象になるわけです。

大学側はこれにより、各学部と専攻科に対して、過去5年間の研究活動状況と、専門分野に関する国際的フィードバックを受ける機会を与えることができるわけです。

国際評価により、ヨーロッパの他大学との研究の質的比較ができ、学内他学部・研究所の研究教育活動の評価、5年間の研究成果、なども公開され一覧できることになります。自分のいる場所の評価が分かるわけです。

この査定によって、過去5年間の反省とともに、今後の研究・教育活動への発展が促されることにも役立ちます。

2.3 方法

実際の査定には、外部専門委員と学長、学部長（研究科長兼務）なども同行しますので、総勢10名近くが丸1日かけて学部全体の設備等を査定します。これには教員が帯同して説明に当たります。3種類の会議が開催されますが、これには学内委員は同席しません。

この日のために、私の学部では、教員・研究員などが出版論文や国際会議参加ポスターなどを新たに壁に貼ったりして整備しました。これらは普段も貼り出しているのですが、すべてというわけではありません。⁹⁾

3種類の会議は、(1) 教員、(2) ポスドク、(3) 博士課程学生、の3グループからなります。それ以外の職員（学部秘書¹⁰⁾、技官等）は評価の対象になりません。評価委員会の仕事は、教育・研究が対象だからであり、大学とは教えるもの教わるものによって学問をする場所だからです。

各専攻から2名ずつが出席しました。私は2004年に博士号を授与されたので、ポスドクのグループに参加するよう専攻長から依頼されました。もう1人は、すでに大学講師でした。

ポスドクのグループには同じ学部の他専攻と別の学部（心理学専攻）の人も入っていました。2名の評価委員はそれぞれ音声・ロゴビディクスと心理の専門家でした。これら専門家はフィンランド以外の国から来ていたので、共通言語は英語でした。それぞれの専門家から、博士号の研究テーマを紹介すること、博士号を取得してからの研究生活等について自由に発言してよい旨が伝えられました。私たちポスドクのグループには2学部4専攻から8名が参加しました。自由に発言してよいということを聞いた途端、このときとばかり、1人が「ポスドクを10年やっているが、1年以上のプロジェクトでの雇用がなかった（短期の連続）」と始めると、「1人の教授がプロジェクトを独占的にいくつも抱えている（自分達が申請しても資金がそちらに回ってしまう）」、「（博士号を取得する過程で）別の指導教授が欲しかった」等々、次々に個人の抱える問題が噴出しました。大学の定職につけなければポスドクをせざるをえません。ポスドクの場合には、Academy of Finlandや大学独自資金をもらっての研究職で3～4年の研究資金が取れなければ、教授が取ってきたプロジェクト（研究資金）に雇用され、それで生活することになります。プロジェクトに雇用されている限り、本来の自分の研究テーマに専念するということはできません。それでも、1部屋あるいは2～3人程度の相部屋で仕事ができ、社会保険もあるので、後日、無職になってもある程度の生活費は確保できます。しかし、プロジェクトが終了すれば、完全な無職になります。研究生活とは縁を切る生活が待っている可能性もあります。常にはらはらして生活することになります。

多くの専攻で、博士号を取得する過程で、2人の指導教授がつきます。スウェーデンの方がフィンランドよりこの点は徹底しているようです。私の場合は1人でした。

なお、この会議後聞いたところでは、教員のグループからは、教育や運営で忙しくて研究の時間がない、設備が不足している、専任をもっと雇用して欲しい、技術的なサポートが欲しい、等の意見が出たこと、また、博士課程グループからは、指導教授が無能である、とさえ言う意見も出た、と聞きました。普段とてもおとなしく見えるフィンランド人ですが、言うときは言うなという印象を強く持ちました。

2.4 結果の公開

さて、外部評価委員は、設備、カリキュラムはもちろんのこと、これら3グループの意見をまとめ、さらに、学部として5年間にどれほどのプロジェクトがあり、どれほどの著作や論文数があつたのか（何語で書いたかもチェック）、何人の学生がどれほど単位を取ったか、修士・博士号取得者をどのくらい輩出したかを総合的にまとめます。その調査結果を上記の目的に沿って大学側に提出します。これは各学部（研究科を含む）、各専攻ごとに7段階¹²⁾で数値（1～7）として提示し、過去5年間の分析、現状分析、将来に向けての方向性の示唆を記述した書類です。大学はそれをウェブに公開するので、皆が見ることができます。同時に、国際委員会の評価は記述されたままの形で学部へ送られ教員が知ることになります。その評価結果を見ると、例えば、「論文は（他国の研究者等も読めるように、フィンランド語でなく）英語で書くように」、「プロジェクトの予算の割には論文数が少ない」、等の記述がありました。

ヘルシンキ大学はヨーロッパでも屈指の研究レベルを持つ大学を目指しています。1999年と2005年の評価結果を比較すると、全学部の平均は明らかに向上しています。（7=100%として、4.8(69%)→5.8(83%)）

この評価点を基に平均点数を出し、最高点・次点の学部には特別な予算が与えられました。

従来から学位数で学部に対する予算が与えられた部分に加えて、現在は学生が取得する総単位数も予算配分の対象になっています。このような学内評価と、国際委員会による評価が統合されて、最終評価となります。

3 さいごに

国際評価委員会の評価方法と結果の報告については、透明性が非常に高いと言えます。

このように、国際評価委員会によって、教育・研究レベルを評価してもらうことは、国内他大学、海外諸大学との比較ができる面で、真にアカデミズムという面から、成果をより客観的に見ることができる、調査結果に基づいて目標を設定できる、という利点があります。また、評価者と被評価者が利害や情実にとらわれずに済むという利点もあります。教員だけでなく、ポストクや博士課程の学生の意見も調査結果に反映される点は、大学運営上も大学における研究環境の改善にも役立ちます。

この国際評価委員会に参加して考えさせられた点は、大学の役割が何か、ということでした。日本でよく行なわれている学生による授業評価には、学生にとって教員の授業がどうであるか、学生が予習・復習をどの

程度しているか、というような問いが圧倒的に多いと思います。¹²⁾ 日本の文部科学省の施策の1つでもあるからです。

フィンランドでも、一部の学部や専攻でこのような授業評価が行われることがありますが、語学に限られた場合が多く、特に注視されてもいませんし、公開されてもいません。参考にする程度、と考えてよいでしょう。

大学は最高学府と言われ学問の場であるはずですが、まして、大学院まであればなおさら研究の質が問われているはずですが、日本の授業評価システムでは、まだまだ大学における研究活動を問うものがあまり見られないように思われます。

ヘルシンキ大学のこの評価システムでは、研究を中心に据え教育を検証する、その結果で、学部予算が組まれる、故に、研究だけしていればよいというものでもありません。

日本で教育を行う場合に、research-basedかどうかには言及されることがありますが、大学であるならば、研究をするのが当然であり、そこで行われる教育はresearch-basedでなければならないと筆者は考えています。教授者が研究活動を活発にしなくて、常に発展しますます細分化している専門学問分野をどうやってより適切に教えることができるでしょうか。

学生による授業評価は大学教育の一面しか見ることができないと思います。故に学生による授業評価が授業改善に必ずしも役に立っていないと言われても無理はないと首肯できる気がします。

大学は学生のレベルがどうであれアカデミズムを軸として運営されなければ、やがて淘汰されてしまうかもしれません。まず評価されるべきは教員の質、それは研究活動であり、その中で教育活動が問われるべきではないのかと評価委員会に参加して考えさせられました。

注

- 1) <http://www.helsinki.fi/university/>を参照。なお、3ヶ国語（フィンランド語、スウェーデン語、英語）での併記になっています。



この図案はヘルシンキ大学のロゴです。

- 2) <http://www.helsinki.fi/>を参照。
- 3) LERU (The League of European Research Universities) に名を連ねる大学は、現在では、ヘルシンキ大学のほか、アムステルダム大学、エ

ディンバラ大学、オックスフォード大学、カロリ
ンスカ大学、ケンブリッジ大学、ジュネーヴ大学、
ストラスブール第1大学、チューリッヒ大学、ハ
イデルベルク大学、パリ第6大学、パリ第11大学、
フライブルク大学、ミュンヘン大学、ミラノ大学、
ユトレヒト大学、ユニヴァーシティ・カレッジ・
ロンドン大学、ライデン大学、ルンド大学、ルー
ヴェン・カトリック大学があります。ヘルシンキ
大学は、研究教育で最も優れたLERU創設時のヨー
ロッパ12大学の一つです。

- 4) フィンランドは独立 (1917) してまだ90年しかたっ
ていません。
- 5) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%AB%E8%AA%9E%E6%97%8F>に説
明があります。
- 6) 例として、<http://211.120.54.153/bo4/gijiroku/007/030101/2-7.htm>を参照。
- 7) <http://www.helsinki.fi/speechsciences/>を参照。
- 8) 目的の詳細はこのホームページで見ることができます：<http://www.helsinki.fi/research2005/english/index.htm>。
- 9) ちなみに、フィンランドでは学生の成績もすべて
公開するので、カリキュラムに加え、学生の成績
も壁に貼ってあります。
- 10) 学部秘書は多くの場合1人だけで、所属学部専門
分野で最低修士号を持っています。教員は秘書に

成績を提出します。

- 11) 日本の学生による授業評価は4ないし5段階であ
ることと比較してください。
- 12) 筆者は文部省メディア教育開発センターの「学生
による授業評価調査支援システムの研究開発」の
公募共同研究員および研究協力者という形で、約
3年間授業評価に傾注したことがあります。授業
評価および授業改善についての報告をいくつか発
表していますが、筆者が編著者の1人として分析
記述した『平成10年度学生授業評価報告』では、
日本における授業評価システムの典型的具体的な
方法について記述しています。

参考文献

- <http://www.helsinki.fi/>
<http://www.helsinki.fi/research2005/english/index.htm>
<http://www.helsinki.fi/speechsciences/>
<http://www.helsinki.fi/university/index.html>
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%AB%E8%AA%9E%E6%97%8F>
http://211.120.54.153/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/007/030101/2-7.html
『平成10年度学生授業評価報告』大沢・小池・伊勢井
他編著 (1999.10) 育英短期大学教務委員会授業評価
小委員会発行

(准教授 人文学部 英語英米文化学科)